

# 全日本アマチュア自転車競技選手権大会報告書

強化委員 大野 直志

- 1 大会期日 平成18年 5月27日(土)～5月28日(日)  
事前練習 5月25日(木)～5月26日(金)
- 2 場 所 宮崎県総合運動公園 自転車競技場(400m)  
宮崎県宮崎市大字熊野1443-12
- 3 選手団

監督	大野 直志	(八戸工業 高校)	
選手	深谷 知広	(桜丘 高校)	チーム・スプリント
	真船圭一郎	(白河実業 高校)	チーム・スプリント
	関根 彰人	(学法石川 高校)	チーム・スプリント
	三木 翔太	(前橋工業 高校)	チーム・スプリント
	須永 優太	(白河実業 高校)	チーム・パーシュート
	坂本 貴史	(八戸工業 高校)	チーム・パーシュート
	巴 直也	(法政二 高校)	チーム・パーシュート
	佐藤 康彦	(日出暘谷 高校)	チーム・パーシュート

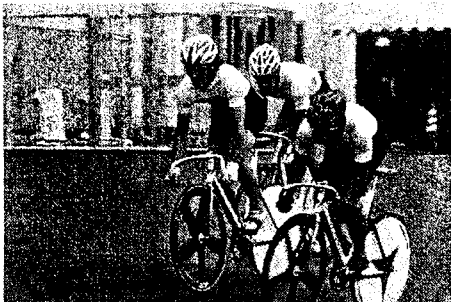
## 4、報告内容

### 4 km チーム・パーシュート

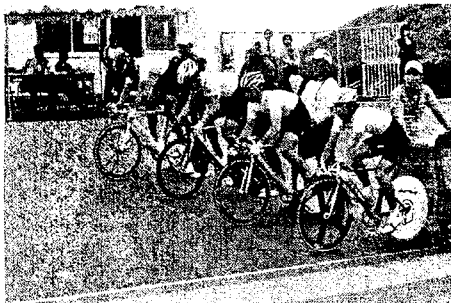
3位 高体連選抜 (須永、坂本、巴、佐藤) 記録 4分49秒874

### チーム・スプリント

3位 高体連選抜 (深谷、真船、関根) 記録 1分20秒938



〈チーム・スプリントのスタート〉



〈チーム・パーシュートのスタート〉

チーム・スプリント(TP)、チーム・パーシュート(TP)ともに合わせを行う目的で、試合の前々日に合宿を実施しました。選手のチームワークを作ることをメインに、周回練習も出場種目毎に振りわけ、スタートの練習や種目毎の合わせを実施した。当初、スタートのタイミングが合わなかったが、次第になってきてイメージ通りのタイムを記録するようになった。選抜されたチームなので合わせる時間は重要で、TS、TP共に出走番手と走行について調整する時間が持つことができ効果があった。TS予選、沖縄県チームとの対戦になったが、スタートを上手く調整してリードを保ち1分20秒188で3位通過する。3・4位決定戦では実業団選抜が相手になったが、1周目からリードをひろげ予選のタイムを上回ることはできなかったが3位に入った。TP予選は宮崎との対戦であり、前日の練習の成果もあり序盤からペースを維持して行くが、後半では今一步ペースが上がらず4分39秒328のタイムで3位通過する。翌日の3・4位決定戦では、TPではポイントレースの直後の競技であったので、スタート後3人になってしまい、相手も同一条件であったので3人での走行になりましたが、前半のリードを守りきり3位に入賞した。

## 所 感

初日のレースは雨が降ったり止んだり、選手のコンディション作りに苦労したが、前々日に宮崎入りして合わせを実施できたことは効果的であったので、これからもこのような形で取り組んでいきたいと思う。最後に選手を派遣していただき、協力した頂いた、各校顧問の先生方に深く感謝申し上げます。

# 全日本自転車競技選手権大会トラックレース報告書

強化委員 大野 直志

1 大会期日 平成18年 7月15日(土)～7月16日(日)

事前練習 7月13日(木)～7月14日(金)

2 場 所 鳥取県倉吉自転車競技場(333m)  
鳥取県倉吉市桜字後口山68-23

## 3 選手団

監督	大野 直志	( 八戸工業 高校 )
選手	深谷 知広	( 桜 丘 高校 )
	真船圭一郎	( 白河実業 高校 )
	関根 彰人	( 学法石川 高校 )
	三木 翔太	( 前橋工業 高校 )
	須永 優太	( 白河実業 高校 )
	不破 将登	( 岐南工業 高校 )
	坂本 貴史	( 八戸工業 高校 )
	巴 直也	( 法 政 二 高校 )
	佐藤 康彦	( 日出暘谷 高校 )

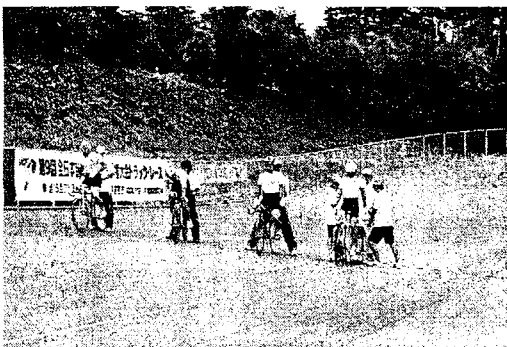
## 4、報告内容

### 4 km チーム・パーシュート

3位 高体連選抜 (須永、坂本、巴、佐藤) 記録 4分37秒445

### チーム・スプリント

3位 高体連選抜 (深谷、真船、関根) 記録 1分06秒722



〈4km チーム・パーシュート 3,4 位決定戦〉

5月に開催された全日本アマチュア選手権の団体種目二種目の3位入賞により、鳥取県倉吉自転車競技場で開催された、全日本選手権トラック・レースに高体連チームが参加した。全アマと同様に合わせを実施するために前々日に集合して事前練習を実施してレースに備えた。レースはTSでは、1分06秒722と予選で記録が伸びず、6位に終わる。続くTPでは、予選を通過したが、強化(プロ)と学連のタイムには、ほど遠く3・4位決定戦で和歌山県と対戦した。序盤から予選より早いペースで入ったが、後半にペースを上げることができ、4分37秒445のタイムで勝利することができた。

## 所 感

全アマに引き続き出場した全日本選手権であったが、TSにおいてはプロ選手との走りの違い、特に1周目の速さに大きな差を感じた。残念ながら記録的には振るわなかったが、前回の試合より確実にチームワークは向上しているので、継続したチーム環境での試合は、事前練習も含めて効果があると感じた。TPに関しても記録的にはもう少しであったが、選手はそれぞれの役割をしっかりと果たし、3位に入賞した。全アマに続いて事前練習をする事によって、プラスに働く面が多いと感じるので、来年度も事前練習を続けていきたい。

## 第14回三笠宮杯

### 「ツール・ド・とうほく」男子ジュニア報告書

強化委員 大野直志

1、日時 平成18年8月11日(金)～8月13日(日)

2、場所

開会式 秋田市協働大町ビル 17:30～  
第1ステージ 個人タイムトライアル 秋田県大潟村ソーラースポーツライン  
第2ステージ 個人ロード 岩手県紫波町東部区  
第3ステージ 個人ロード 仙台市泉区泉ビレッジ

3、報告内容



【宮城最終ステージのスタート】

第14三笠宮杯「ツール・ド・とうほく」が、8月11日男子高校生は14チーム、女子6チームの出場で開催された。

第1ステージは昨年同様、大潟村ソーラースポーツラインの個人タイムトライアルで、高校生(20km)、女子(10km)、の距離で争われた。天候にも恵まれ、上位のタイムは28分台と好タイムが続いた。初日トップに立ったのは石田正樹(青森・八戸工業)で2位には吉田隼人(奈良・榛生昇陽)が11秒差、3位には伊丹健治(群馬・前橋育英)が15秒差で続いた。

第2ステージは岩手県、紫波町東部地区で行われ、序盤からトラブルが発生し、総合2位につけていた吉田が、車輪のトラブルで順位を大きく落とす。上位では石田が積極的に動き途中のボーナスタイム2秒を獲得する。集団は大きな変化がなくゴールは近畿選抜の野口正則(奈良・榛生昇陽)が制した。総合成績は石田が2位の伊丹に対して17秒のリードを築く。

最終ステージは泉区の起伏の激しい周回コースで行われた。序盤から長い登りにより脱落する選手が続出する中、集団には大きな変化がなく最終周回の登りで伊丹がアタックするが、石田を引き離す事ができず、そのままゴールスプリントになり中田 匠(岩手・紫波総合)が区間優勝を飾った。総合優勝は石田が17秒のリードを守りきり優勝した。

#### 所感

14回目を迎えた「ツール・ド・とうほく」は天候にも恵まれ3日間にわたり熱戦が繰り広げられた。タイムトライアルでの順位が、レース展開に大きな影響を与え、挽回するチャンスが少ない本レースでは、初日の成績が特に重要であると感じた。また、3日間のレースを経験する機会が他になく、昨年に引き続き出場した選手は結果が出ていたが、初参加の選手は良い結果に繋がっていなかった選手が多かったので、経験の重要性を強く感じた。最後に今回の大会にご支援・ご尽力いただいた関係各位にお礼を申し上げます。

## 2006年日韓学生対抗自転車競技大会報告

コーチ 折本 裕樹

期 間 平成18年9月22日(金)～23日(土)

会 場 日本サイクルスポーツセンター(北400m)

大会は本年度で12回目を向かえ、日本での開催となった。一昨年は福岡小倉ドーム、川崎、取手等で日本と韓国の隔年開催で毎年実施されている。昨年は韓国開催であるが、高体連として次年度(18年度)開催する運営費のめどが立たないこと理由に代表選手派遣を見送ることとした。しかし、この大会の趣旨である両国の自転車競技の発展につながる部分や交流事業としての教育的な側面も十分に認められることで開催に対して大きな負担が無ければ続けて行きたいと感じる。特に韓国の自転車競技の発展は目覚しく、トラック・ロード、男女ともに日本以上の実力を感じる部分を見ることができる。開催場所は日本CSC、北400m、学連個人選と併催と聞いていた。

4月に行われた高体連常任理事会でも予算的な措置が見込まれれば委員会として前向きに考えたい。と発表したが、運営・企画スタッフ、選手強化対策、参加に向けて実施種目やその他詳細が決まらず実施要項が完成したのは1ヶ月を切っていた。主催も学連との共催事業であり、高体連も参画しなければならないが、改めてその難しさが見え隠れした。現在は4年前から“親善”大会名から削除され文字通り、国家間と対抗戦となる。開催された同月はアジアジュニア選手権も開催され、韓国選手団のアジア選帰国に絡めた最短の日時で行われた。また、経費削減のために学生個人選とうまく組み合わせたもので工夫が見られた。

高体連では開催日時が決まり、要項が固まれば選手選考となる。日本開催となれば無様な負け方は許されない。団体種目が高校生はチームスプリントと限定のために様々なシミュレーションを組んだ結果インターハイチームスプリント優勝校(栃木:作新学院高校)選手3名がインターハイ個人種目においても上位入賞していることより選考し、更に3km、ポイントレース優勝者をもって編成した。

女子は大学生3名、高校生の2名は実績のある(熊本:千原台高校)より選考した。また、スタッフに関しては高校コーチを上野先生(和歌山北)、

大学生を含む女子コーチ中田先生(千原台)、全体コーチを私が務めた。

大会参加にあたり、最大限の努力と工夫で最大効果をねらい、参加条件としては国民体育大会1週間前という日程やそれぞれの選手強化を考えて、集合日より2日前に現地集合をかけ、チームとしての意思の疎通を図ることや走路に慣れることを目的とした直前合宿に入った。

トレーニング内容は担当のそれぞれのコーチに一任し、ハロン練習、スタート練習等を中心に行った。周回練習等もウォーミングアップにおいてラップタイムが早すぎるためにバラバラになってしまったこともあったが日を追うにつれ、仕上がりが良くなってきたと思う。

大学生選手ももとは高体連選手であるが指示待ち体質と大会出場に向けた選手強化対策が学連に今ひとつであり、未だ強化委員会は存在しない。

### 大会報告

大会は各種別2名(ケイリンは高体連1名)

スプリント予選はハロンで上位2名が1/2決勝へ進出する。雨谷一樹(栃木:作新学院)11秒252 3位、磯田旭(栃木:作新学院)11秒633で4位となってしまった。2位とは千分の2差で大変惜しい結果であった。結果は1/2決勝で両名とも敗退、3、4位決定戦で雨谷が勝ち3位となった。女子2kmIP出場の柘原彩(熊本:千原台)は2分43秒921という平凡タイムで3位であったが、作新学院の3名と柘原は2年生ということもあり次年度の活躍を期待したい。

インターハイ3kmIP優勝の不破将登(岐阜;岐南工業)は3分45秒台まさかの3位、ポイントレース優勝の奥崎心吾(青森:青森山田)が3分42秒で2位、優勝はツ・ジュン・ヨン3分36秒936で快勝。初日、日本開催であるが韓国選手団に押され気味であった。

最終日:1kmタイムトライアルで1分09秒台ながら昨日の雪辱を果たし不破が優勝、インターハイ2位の長島大介(栃木:作新学院)は4位であった。中間のコミュニケが発表され、同点にて

団体種目を残すのみとなった。女子チームスプリント大学生2名、佃，篠崎に福島麻美（熊本：千原台）が加わり福島の持ち前のダッシュの良さからのチーム力を期待していたが，大会期間中に佃が体調を崩し，入院中を余儀なくされてしまった。

これで韓国との善戦は期待が薄くなってしまった。しかし，予想に反して韓国を堂々破り優勝してしまった。これで一気に日本チームの盛り上がりは最高潮に達した。次に期待のかかる高校男子チームスプリント3名の2年生は日頃から練習を共にする作新学院チームである。ほぼ互角の戦いが続き最終回で差を縮めることができずに敗退。しかし，インターハイタイムを1秒以上短縮しており賞賛は与えられると感じた。日頃，指導している山本先生においても合宿から全期間同日程で参加してのバックアップ体制には頭が下がる。

いよいよ最終種目，男子大学生によるチームパーシュートである。日本大学チーム3名，中央大学1名を中心としたメンバーとの対戦である。勝った方が両国間の優勝を左右するという重大な局面である。終始安定した走りをみせ，決して好タイムではなかったが4分41秒888のタイムで韓国に勝つことができた。

結果を見ると日本男子大学生38点，韓国14点，日本男子高校生14点，韓国34点，日本女子26点，韓国女子27点であり，大学生の活躍で日本側が総合優勝であった。女子に関しては韓国選手団は全員高校生であり，相当なハンディを頂いた結果の敗退，高校生についても競技人口，競技場（競輪場）数を考えても完敗であった。

以上の結果から“世界を見据えた，アジアで勝つ施策”が重要であるのではないかと思った。

韓国の選手強化システムを考えると，日本と同様の教育システム小・中・高（6，3，3制）と同様であり，国柄として儒教精神国家，合理性重視であり，日韓対抗にかける意気込みは強いものを感じる。必ず10日以上合宿をして来るし学生連盟が中・高・大と分離しておらず組織的な一貫指導を施している。また，専任コーチをカテゴリー別に配置，資金は基本的にスポンサー企業または個人が会長として君臨している。

韓国チームは本年のジュニア世界選手権には出場しておらず，理由はメダルを取れる選手が居ない，費用対効果を前面に出している。場当たりの指導では太刀打ちできないことは悉く証明されつつある。自転車後進国であった韓国が日本に追いつき追い越された気運はぬぐえない。最後に大会運営に当たっては高体連の先生方の協力には感

謝申し上げたい。日韓学生対抗が終わり，翌日も学連大会へ尽力された技術審判委員会から高畑先生，総務委員会から早川先生，強化委員会から伊藤先生，近県応援役員として寺崎先生の各位には大変お世話になりありがとうございました。また，母体の違う団体同士での取りまとめを山口理事長が行い大変お疲れ様でした。

## 2006全日本チーム対抗自転車競技大会報告

報告者 折本裕樹

大会期日 平成18年11月3日(金)

会場 日本サイクルスポーツセンター(250m)

参加者 監督 山本宏恒(栃木:作新学院)高体連推薦

チームスプリント作新学院高 磯田 旭・雨谷一樹・長島大介

チームパーシュート岐南工業高 山田純也・高橋翔太・横関裕樹・不破将登

2004年、アテネ五輪においてチームスプリントにて銀メダルを獲得した日本チームの活躍は、まだまだ記憶に新しい。その団体種目を強化する目的と250m走路公認大会として昨年度より開催された大会である。昨年は年度途中のオフアーに対して選手選考や費用面等で参加決定までの時間的な余裕が無く不参加であった。しかし、高体連として参加できるわずかな大会であるために条件さえ揃えば代表選手を派遣することについてはやぶさかではない。本年度については派遣する意向で作業を進めた。派遣選手選考にあたっては種目別優秀者においてチームを編成するか、優秀チームを派遣するか二通りの案で協議をはじめ、高体連最高峰の大会であるインターハイから選考する、250mバンク走行を考えた場合、団体種目はチームで練習をすることにより技量を向上させるが混成チームでは時間が無いことなどを鑑み、インターハイ団体種目優勝校の作新学院高校、岐南工業高校を選考した。

監督を作新学院高校へお願いし、懸案であったジャージの購入に関しても所属ジャージが許可された。また、前日の練習は不可欠であると判断し、高体連から宿泊費の一部補助した。この大会はチームスプリン

ト(5チーム、以下()内チーム数、人数等)・パーシュート(4チーム)を中心に250m(5名)・1kmタイムトライアル(6名)、更に中学生の250m(3名)、500m(3名)小学生も250m(3名)のタイムトライアルが実施された。結果は1kmタイムトライアル不破将登(高体連:岐南工業)1分08秒934で2位、長島(高体連:作新学院)1分09秒925で3位、250mは雨谷一樹(高体連:18秒827)で1位、団体種目結果、チームスプリント49秒602で2位、優勝した学連チームとの差は0.2秒差であった。チームパーシュート4分41秒217で3位であった。

以下内容は監督である山本宏恒先生の話をもとめたものである。

- ・前日からの指定練習ではバンクに慣れることを目的に周回・スタート練習を行えてよかった。
- ・参加人数は5チーム、約30名であり大変、寂しいものを感じた。
- ・選手にとっては250mバンクでの競技会や走る機会は殆ど無いので、経験としては良いと思うが大会のステータスと全国と名が付く大会としては盛り上がり欲しい。

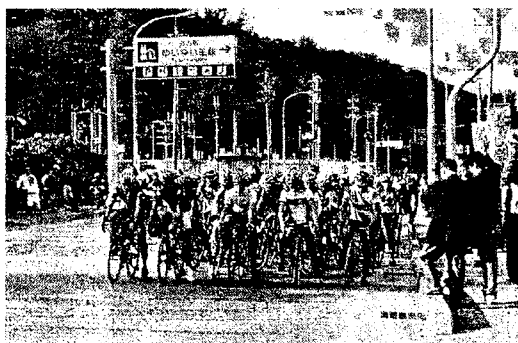
# 「2006ツール・ド・おきなわ」男子ジュニア国際レース報告書

強化委員 大野直志

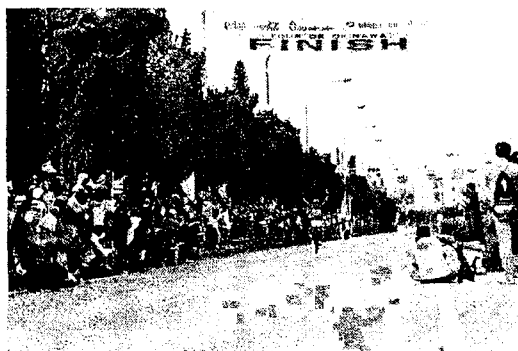
- 1、日 時 平成18年11月12日(日)
- 2、場 所 沖縄県名護市、国頭村、東村、周辺道路
- 3、参加選手

石田 正樹	青森県立八戸工業高等学校	伊丹 健治	前橋育英高等学校
青柳 憲輝	作新学院高等学校	鳶田 義明	埼玉県立川越工業高等学校
伊藤 雅和	法政大学第二高等学校	奥原 亨	法政大学第二高等学校
竹之内 悠	立命館宇治高等学校	松井 響	京都府立北桑田高等学校
吉田 隼人	奈良県立榛生昇陽高等学校	入部 正太郎	奈良県立榛生昇陽高等学校
大西 周太	三田学園高等学校	越海 誠一	別府市立別府商業高等学校
山國 渉	熊本市立千原台高等学校	大久保 陣	鹿児島実業高等学校
内間 康平	沖縄県立北中城高等学校		

## 4、報告内容



〈スタート地点の国頭村道の駅〉



〈名護市民会館前のゴール〉

「ツール・ド・おきなわ2003」男子ジュニア国際レースは11月12日、天気にも恵まれ実施された。参加数50人で行われた。これまでのスタート地点が変更になり距離10kmほど伸びたが、待機する駐車場付近にはジュニア国際ロードの他にも市民レースに参加する選手も同じ地点なので、300人前後が集まった。レースは昨年と違い普久川ダムまでの登りが2回あるので序盤の動きは消極的であった。安田地区を過ぎると、フェンチュンカイ(タイペイ)、クォクホーチン(ホンコン)、入部(榛生昇陽)の3名が集団をリードしていく。周回が終わり安波付近から藤岡(兵庫)、小林(広島)、伊丹(前橋育英)の3人が集団を抜けて先頭を追いかけ始める。先頭の3名は川田付近にさしかかると、クォクホーチンが離れて、フェンチュンカイと入部の2名になる。後方からの3名はクォクホーチンを抜き去り先頭を追う。最後の登りでフェンチュンカイから入部が遅れてしまい、フェンチュンカイはそのまま独走でゴールする。入部は後方の4名に吸収されゴールは藤岡、小林、伊丹、入部の順でゴールした。

## 所 感

今回のジュニア国際120kmは、天候に恵まれスタート地点も宿舎から近くなった。しかしレースの運営上、200kmのチャンピオンレースが通過するまで待たねばならず、スタート時間がずれてしまうので、選手に注意が必要である。レース全体を振り返って見ると、普久川ダムまでの登りが2回に増えたことで、レースの難易度が上がり、体力的に厳しいコースになった。前半から外国勢が積極的に動き、高体連の選手の展開が後手に回ってしまったことが、外国勢の独走を許す結果となった。国際レースを走る機会が少ない高校生にとっては貴重な経験になったが、外国勢と大きな差を感じたので、この差を埋められるように強化していきたい。